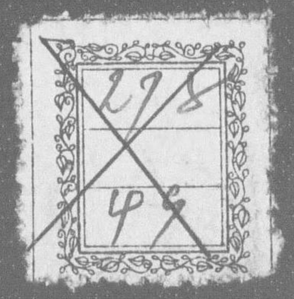
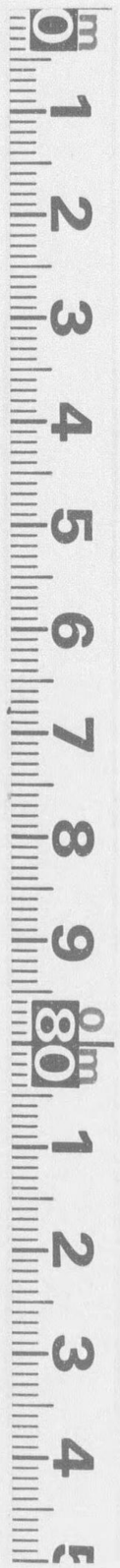
偉人警句集

宮地猛男著

特101
576





始

處世修養 偉人警句集

宮地猛男著

（要領文庫第貳編）

大正
3. 11. 19
內交

特101
576

本書の特色

一　從來の格言集が、書に依りて題を分ちたるを、本書は人に依りて、分類したること

二　從來の格言、壁書中には、間々長文に亙る議論ありて、記憶に不便なる者あるを、本書に於ては、所謂警句のみを精選して、此缺を補ひたる事

三 從來の金言集が、儒教流の教訓に偏したるを、本書は、教訓は素より、支那にては老莊諸子百家、西洋にては文學者、哲學者は勿論、政治家、大論客等、諸階級を包括し、所謂月並の單調を破りたること

四 人別に其略傳を附し、以て讀者の參考に供したること

五 生活難の一助たらしめん爲、特に經濟的處世的の警句を多く選びたる事

六 近代人の警句は、未だ以て他書に見ざるところなり

以上

内容

一　ゲーテ（大詩人）……一
二　シエークスピヤ（世界的劇作家）……三
三　ジョンソン（大論客）……六
四　エマーソン（思索家）……九
五　カーライル（文明批評家）……一三
六　スマイルス（教訓家）……一五
七　マコーレー（文　家）……一七

八　スペンサー（道德家、學者）……一九
九　ベーコン（哲學者）……二一
十　グラドストーン（大政治家）……二四
十一　ビスマーク（大外交家）……二五
十二　ルーソー（狂熱的大思想家）……二六
十三　孔子（聖人）……二九
十四　孟子（政論家）……三四
十五　老子（隱遁者）……三八

十六　莊子（虛無哲學者）……四〇
十七　韓非子（權謀家）……四三
十八　孫子（兵法家）……四八
十九　列子（處士）……五二
二十　韓退之（文豪）……五六
二十一　荀子（異端論者）……五八
二十二　楊子（異端哲學者）……六三
二十三　墨子（道德論者）……六五

二十四　蘇　秦（雄辯家）……七〇
二十五　豐臣秀吉（世界的大英雄）……七一
二十六　西鄕南洲（志士、豪傑）……七三
二十七　德川光圀（勤王家）……七五
二十八　澤庵禪師（禪　僧）……七七
二十九　二宮尊德（經世家）……七九
三　十　貝原益軒（儒者、文章家）……八二
三十一　中山みき子（宗教家）……八四

三十二　著者の警句……八六
■近代人の警句（附錄）……八八
1　大隈重信（偉　人）……八八
2　尾崎行雄（政治家）……九〇
3　安田善次郎（實業家）……九一
4　三宅雪嶺（哲人、評論家）……九三
5　黑岩周六（哲學者、評論家）……九五
6　茅原華山（文明批評家、新聞記者）……九六

内容終

7 安部磯雄（社會學者）……九八
8 加藤咄堂（修養論者 雄辯家）……一〇〇
9 浮田和民（政治學者）……一〇二
10 内ケ崎作三郎（牧師）……一〇三

處世修養

偉人警句集

宮地猛男著

一 ゲーテ

大詩人（獨逸ワイマルの貴族の出にて、十九世紀初頭の文壇に風濤を捲き起したる大思想家なり。）

▲汝の位置を決定して、而して世界を動かせ。

▲希望は風雨の夜にありて、已に曉霞を現はす。

▲あらゆる固定せる觀念を攪亂するは、天才の本性なり。

▲吾人は充分に實用に適するの見込なき才能を、拒絶せざるべからず。勿論斯かる才能なりとて、吾人を上達せしめ能はざるに非ず、然れども吾人は之が爲、時間と氣力を費したるを悔ゆるの時あるべし。

▲智惠は眞實の中に存す。

▲用心は臆病にせよ。

▲自信は大人となる第一資格なり。

▲人は凡そ三事を要す。名譽、富、快樂是なり。

▲智識無き熱心は、愚痴の姉妹なり。

▲自らを顯さざる人は、社會に看過さる。

▲大利は大害より來る。

▲爲さんと勉むる人は、力を有する人よりも、一層多くの事を爲す。

二　シエークスピヤ

世界的劇作家

（英國エリサベス朝の花と歌はれたる人、其傑作「ハムレット」「シーザー」等が世界的名聲を博しつゝあるは言を待たず。）

▲余を愚と笑ふ可からず、笑はゞ、余が幸運に乘じたる後に至りて、一驚を喫するならん。

▲重大なる事業を爲さんとせば、言語を省け。

▲大苦は小苦を癒す。

▲愉快なれば、終日歩み、憂悶すれば、僅かに一里にして倦む。

▲人事には潮汐あり。滿潮に乘ずれば、幸運に達す。

▲猶豫は危險なる最後を有す。

▲小さき斧も屢々擊てば、最も堅き樫を倒す。

▲己に不用なる人は他にも不用なり。

▲鳥の飛ぶや、必ず一物を攫む。

▲事業を爲せ、而かも之が奴隷となる勿れ。

▲一度び艱難せんよりは、常に準備を具ふるを勝れりとす。

▲希望と期待とは、愚者の所得なり。

▲人生に於ける唯一の得策は、集中なり。唯一の失敗は散漫な

り。

▲注意せざれば得ず。

▲成功は幾分の積極力には、必ず從ひ來るものなり。

▲不變は德の基なり。

▲練習は十中の九に居る。

三　ジヨンソン

大論客〔英國十八世紀の文豪、カーライル、エマーソンと併稱されたる大論文家にして、文章と反對に、風采の最も擧ちざるを以て有名なり。〕

▲當然の苦痛は、不平を鳴らさずして、之を忍べ。

▲人は多く人生の目的如何を顧るなくして、生涯を終るが如し。

▲一人は一書の外、著作す可からず。

▲人生は短し。然れども野卑の事に費さば長きに過ぐ。

▲集中は常に精力の祕府なり。

▲時間は、一度び去りて又歸らず。瞬時も之を失ふは卽ち永久に之を失ふなり。

▲何人も吾が生命の短きを信ぜり。

▲己れの事業のみに注意せよ。

▲大事は力に依りて成るにあらず。不撓不屈に由りて成れるなり。

▲懶惰の敵は、諸敵中、最も恐る可きの敵なり。

▲多くを爲すは易く、一事を永續するは難し。

▲富は麵麭と屋蓋の外に、要するもの多し。曰く市町の自由、土地の自由、旅行、音樂、美術及び最良の朋友。

▲汝の運命を擴げざれ。汝に托されたる以上の事を爲さんと務むる勿れ。

▲讀書に三種あり。曰く蟻的、曰く蜂的、曰く蜘蛛的、是れなり。

▲虹は七色の弧なりと雖、七色の弧必ずしも虹を作らず。

四　エマーソン

思索家（米國コンコルドの聖人として有名なる人、其著「人間社交論」等廣く行はる。）

▲童子に禮貌と藝能を授くるは、則ち之に富を得るの術を授くるなり。

▲汝に滿足を與ふる事を得るは、唯汝のみ。

▲人間には、或職業を嗜好するの性あり。此職業に從事すれば、必ず世上に用ひられ、幸運を受くべし。之を立身すべき天運といふ。

▲事業に費せる時間は、決して損失に非ず。

▲忍耐力を有せざる人は憐むべきかな。

▲艱難の時は、善人の爲に燦然たる機會なり。

▲汝の天より與へられたる事業をなせ。然らば如何程大なる希望を懷くも可なり。如何なる計畫を肯ずるも可なり。

▲汝は萬事汝が思ふ如くにならん事を、希望する勿れ。其爲るが如くにならん事を希望せよ。

▲神に愛せらるゝ者は早世す。

▲吾人は神を望んで、飽迄も向上し、向上して止まず。茲に時間も空間もあるなし。

▲汝ら賢者たらん前、愚者たれ。

▲それ道理によりて、事に從ふ者は、能くならざるなし。

▲動靜の節に適ひ、思慮の費を省くべし。

五　カーライル

文明批評家　英國十九世紀初頭に於ける文豪、其性情の奇狂、疎剛と其文の皮肉を以て鳴る、其著「英雄崇拜論」「佛國革命史」は不朽の聲譽を博せり。

▲貧困苦難と爭ひし人は、夫の戰場に出でずして、家に止まり、

糧車間に潛伏し乍ら、愚言を吐く者よりも遙かに强壯、老練なり。

▲明日爲す可き事は、今日之を爲せ。

▲勞力は地と廣さを均くし、天と高さを均くす。

▲凡ての事業は、綿布を績ぐと雖貴し。貴きは事業なり。

▲勉强と誠實とを不斷の友となせ。

▲過去と未來とは、善美の貌を呈し、現在は醜惡の觀を呈す。

▲汝は生命を愛するか、然らば時間を浪費する勿れ。時間は生

命を造る元素なり。

▲時間を利用せよ。一分を失ふは一時を失ふなり。

▲所有の物品は、各々其置場所を定め、豫定の事業は、悉く時間を設く可し。

▲不正の所業を用ひ、或は自己の職分を怠りて、他人に損害を與ふ可からず。

▲生命が形をとれる間は、人に賞せられ、人に愛せらる。されど生命一度び其體を去らば、一樣に人に忌まるゝなり。

六　スマイルス

教訓家（成功倫理の開山にして、其閲歴も頗る波瀾に富む。其著「自助論」は最も廣く世に行はれ、之によりて成功したる者數ふるに遑なし。）

▲若し時間的觀念なくして、漫りに事功を期しなば、恰かも木に縁りて、魚を求むるの類なり。

▲健康の秘訣は、寡慾、質朴、苦行なり。

▲死に面して、膽の大なるものは、直ちに自由の人なり。

▲不斷に勉強するは、天の道なり。

▲精神的勞働の爲、決して身體を犧牲にせざれ。

▲物質の結合が益々親和、完全なるに從ひて、生活力は益々高顯著明を加ふるものとす。

▲元氣の向ふ所、病少し。

▲人は衣食を要するより、幾分か偉大なる要求を天下に向ひて爲すなくば、到底其天才を十分に發揮するを得じ。人は生來費用多きものなれば、富むべき必要あるなり。

▲快樂無き境にある者は夭折す。

▲孜々として倦まざる勤勉は智慧を凌駕す。

▲用務と就褥と、僅々五分間の閑に滿足せよ。

天未だ生り出でず、汝、世界を造り給はざりし時、永遠より永遠まで汝は初なり。

（クリスト）

七　マコーレー

文豪（英國の人、文章の流暢瑰麗を以て鳴る、日本にては蘇峰式の筆なり。其著「英國史」最も著はる。

▲爾若し著はさんと欲せば、書を著はせ、爾若し作らんと欲せば、詩を作れ、然れども之が爲、斷じて其職を忽せにする勿れ。

▲智の本性は、深き井の水の如く、冷かなり。

▲書は少年の食餌、老年の娯樂、順境には粧飾となり、逆境には庇蔭と慰愉を與ふ。家にありては、娯樂となり、外に出ても障害たらず、敎の伴、旅の伴、僻地の友。

▲詩人の作を譯せんとするは、猶バイオレットの花を採りて坩

堝に投じ、元の儘なる色香を求めんとするが如し。

▲蕀を見よ、花の如何に美はしく、如何に香ばしきよ。されど花の裏には、蛇の巣ありと知らずや。

▲愛は寛忍をなし、又人の益を計るなり。愛は妬まず、誇らず、又驕らず。

ハ　スペンサー

道德家、學者（ダーウインの進化論を祖述して有名なる人。殊に實踐倫理界に重きをなし、敎育界に雄飛せり。英國の人。）

▲經濟的動機は消費せんとする慾望なり。

▲精力强からざる者、狡獪ならざる者は、漸次衰滅し、自ら防護するの力ある者は殘存して、其種類を繁殖するを得べし。

▲生存競爭に投ぜらるゝ單位は、家族全體なり。

▲食を得るに從つて、愈々慾望を增加する動物は、唯人間あるのみ。又決して滿足する所なき動物も、唯人間あるのみ。

▲漸次社會的野心の到達し得べき範圍を擴張し、終には個人の想像力の外、何等の限界なきに至る。

▲人生の最適者は、强さ、速さ、狡獪、戒愼、智能的敏捷に於て各々秀でたるものなり。

九　ベーコン

哲學者（英人にして、教育家、又道德論者なり。十九世紀に於ける經濟學者ミルと並んで、十七世紀論壇の花とす。）

▲智者たらんと努むるは、これ卽ち人間最高の努力にして、又人間最高の自由なり。

▲氣力旺盛の人士にとりては、何處にも必ず餘地の入るべきあり、又許多の人々の爲にも、餘地を作りて與ふ。蓋し社會は思想家の一隊なり。彼等の中に於て、頭腦の最も良きは、最も良き位置を占む。

▲人と人との間には、必ず力を較ぶる事あり。其狀甚だ鄭重なれども亦斷然たる者あり。爾後之等の人々相會する時には、既に默々の內、優劣の認識あるなり。

▲社會の大事象は、畢竟偉人の胸中にある、觀念の表現のみ。

▲社會的活動は、吾人に實在の念を深からしむ。

▲萬有は無道德なり。

▲夫れ人は滿足によりて死し、信仰と希望とによりて生くる者なり。

▲人間は、自己の背すら見る能はず。況んや宇宙の背景をや。

▲働かずして居れば、世は一場の夢なり。

▲無限は不可思議なり。道理の力及び難し。

鎭守の沼にも蛇は棲む、笑の中にも研ぐ刄。

（近松門左衞門）

十　グラドストーン

大政治家（政治的手腕の非凡なりし而已ならず、其重厚なる人格は、英國紳士の模範なり。）

▲人を生むは天然なり。人を造るは社會なり。

▲達人は未然を察す。

▲無限は靈性ある人間の特權なり。

▲因循は事を利せず。

▲今日一事を改め、明日又一事を改む。

▲虚飾に安全なく、失策に快樂無し。

▲嗜好、情慾を有するは、猶穴ある甲冑を着て戰ふ如し。

▲利子高きは保證少し。

▲百圓を得て、九十四圓を消費するは幸福なり。

十一　ビスマーク

大外交家（鐵血宰相を以て世に顯る。ウイルヘルム一世を助けて獨逸の基礎を築きたり。）

▲世より水蒸氣として、受取りたるものを、水となして返却するを以て、最も興味多き生活と思ふ。

▲若し勇氣去らば、總てのものは去れるなり。

▲名譽は、其業をなすの巧拙によりて定まる。

▲他人の業は易く、且つ樂しき如く見ゆ。

十二　ルーソー

狂熱的（自然に歸れと叫び、極端なる自由主義を狂呼したるの人。）
大思想家（佛國革命は、彼の導火線に負ふ所大なり。）

▲人間の天性は平等なり。

▲感情は思想を明白ならしむ。

▲熱心とは、或目的に意識を集中する事是なり。

▲凡ての人の僕となる事の出來る人は、最も偉大なる人物也。

▲運命とは、過去に犯せる罪業のみ。

▲若し打擊に萬能力あらば、抵抗にも萬能力あり。

▲社會も法則も、唯個人の幸福の量を增加する爲に存す。

▲敎育は、天賦の能力を發達せしむるに過ぎず。

▲言語は、明確と複雑に從つて發達す。

▲食ひ且つ暖まるに從ひ、初めて高等なる社會的活動をなす。

▲生活は一種の夢幻境のみ。

▲宇宙は、勢力の世界なり。宇宙は生命の世界なり。宇宙は法則の世界なり。

▲妻君に儉約を守らしめんとせば、月々の入額を知らしめ、業務の一部を擔當せしめよ。

▲使用せざるの貨財と、利用せざる信用とは、快樂に算入すべからず。

青年は宜しく全生活の統一を計るべし　（フレーベル）

十三　孔子

聖人（春秋戰國の世に生れ、天下を周遊して、仁義の道を講ず、從ふ者七十餘人、其著「論語」は東洋倫理の經典なり。）

▲容れられざる、何ぞ病まん。容れられずして、然る後君子を見る。

▲其心を盡す者は、其性を知るなり。其性を知る者は、卽ち天

を知るなり。

▲凡そ學は必ず時あり。春は誦し、夏は絃す。

▲詩に曰ふ、鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍るは、上下察かなるを言へるなり。

▲君子易に居て、以て命を待つ。小人險を行ひて以て幸を邀ふ。

▲天の物を生ずる、必ず其材によりて篤し。故に栽うる者、之を培ひ、傾く者之を覆す。

▲詩に曰ふ、明且哲、以て其身を保つ。

▲射は君子に似たり。諸を正鵠に失ひ、反て諸を其身に求む。

▲君子は言を以て、人を擧げず。人を以て言を廢せず。

▲仁に當つては師に讓らず。

▲天何をか言ふ哉、四時行はれ、百物生る。天何をか言ふ哉。

▲命を知らずんば、以て君子無きなり。禮を知らずんば、以て立つ無きなり。言を知らずんば知人無きなり。

▲紫の朱を奪ふを惡み、鄭聲の雅樂を亂るを惡む。

▲君子の德は風なり。小人の德は草なり。

▲子貢一日孔子に問ふに、終身守るべき道を以てしたるに、夫子曰く『恕』。

▲夫子に四つの語らざるものあり。『怪、神、力、亂』

▲顏淵、仁を問ふ。子曰く、己れに克ちて禮に復る。

▲內に省みて疚しからずば、何をか憂へ、何をか懼れん。

▲子貢政を問ふ。子曰く食を足し、兵を足さば、民之を信ず。

▲士にして居を思はば、以て士となすに足らず。

▲天を怨まず人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は夫れ天乎。

▲言、忠信にして、行、篤敬ならば、蠻貊の國と雖、行はる。

▲君子は人の美を成し、人の惡を成さず。小人は之に反す。

▲人能く道を弘む。道人を弘むるに非ず。

▲肉多しと雖、食氣に勝たしめず。

▲食ふ時語らず、寢ねて言はず。

▲席正しからずんば、坐せず。

▲盛饌あれば、必ず色を變じて作つ。

▲廐焚く。子、朝を退いて曰く、人を傷けしかと、馬を問はず。

十四　孟子

政論家（孔子の祖述者にして、專ら帝王の道を説きたり、其文章は雄健を極め、光彩陸離、才氣煥發す。）

▲萬物我に備はる、身に反て誠なれ。

▲古の人、志を得れば、澤民に加はる。

▲文王を待ちて後興る者は、凡て民なり。若し夫れ豪傑の士は文王無くも猶興る。

▲佚道を以て民を使ふ、勞と雖も怨まず。生道を以て民を殺す、死すと雖も、殺す者を怨まず。

▲君子に三樂あり。父母俱に存し、兄弟故なし、一樂なり。仰いで天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず、二樂なり。天下の英才を待つて之を敎育す、三樂なり。

▲天爵者あり、人爵者あり、仁義忠信を樂んで倦まず。古の

人天爵を修めて、人爵之に從ふ。

▲惻憱の心は仁の端なり。

▲仁にあらずんば爲すなく。禮に非ずんば行ふなし。

▲仁の不仁に勝つや、猶水の火に勝つが如し。今の仁をなす者、猶一杯の水を以て、一車薪の火を救ふが如し。熄まざれば、則ち水、火に勝たずと云ふ。

▲三代の天下を得るや、仁を以てす。その天下を亡ふや不仁を以てす。

▲君子動かずして敬、言はずして信。

▲道は邇きにあり。

▲仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。安宅を曠うして居るなく、正路を舍てゝ由るなし。哀い哉。

羞不出

新婦禮を失ひ。　尼姑懷孕す。
相撲人面腫る。　富人乍ち貧。
處子物議を犯す。　重厚酒に醉ふ。　（李商隱）

人は佳肴と金錢と婦人を要す。若しこれらの滿足を得ざる時は自殺す。
（センテスキユー）

十五　老子

隱遁者（無爲自然を人生の極致なりと說きたる、道敎の開祖。孔子の老龍と敬稱せしより考ふるも、希有の人品を察すべきなり。）

▲生れて生くる者は、固より動く、動く事盡くれば、則ち損ず。而して動きて止まざるは、損じて止まざる也。

▲聖人其神を愛寶すれば、則ち精盛んなり。

▲恬淡、平安の身は、積々を以て德となす。

▲將に取らんと欲せば、必ず固く之を與ふ。

▲大器は晩く成り、大音は聲稀なり。

▲知の難きは、人を見るに非ずして、自ら見るにあり。故に曰く、自ら見るを明といふ。

▲瓦を以て搏つ者は巧みなり。鈎を以て搏つ者は憚る。

▲善い哉。古人の死あるや、仁者は息し、不仁者は伏す。

（註、息は休息、伏は滅亡なり）

▲天地吝を以て道となす。

▲至言は言を去り、至爲は無爲なり。

▲名の名とすべきは、常名に非ず。

▲天地仁ならず、萬物を以て芻狗となす。（註、芻狗は人形の如し）

▲虛を致す事を極め、靜を守る事篤し。

▲大道廢れて仁義あり、

燈火は吹くに消え、炭火は吹くに燃ゆ

（日本俚諺）

十六　莊子

虛無哲學者（老子の祖述者、別に南華道人、又は漆園と呼ぶ。其著「莊子」中の胡蝶の夢、逍遙遊は有名なり。）

▲道を知る者は、必ず理に達す。理に達する者は、權に明かなり。權に明かなる者は、以て物を害せざるのみ。

▲德は內にあり、得は外にあり。

▲思慮熟すれば、事理を得、行、端直ならば、則ち禍害なし。

▲禮の繁きは、實心衰ふればなり。

▲全壽、富貴なるを福と云ふ。而して福は禍あるに基く。

▲生を生ずる者は、未だ嘗て終らず。

▲凡そ物は幷び盛んならず。陰と陽と是れなり。

▲魚は我の欲する所也。熊掌も亦我の欲する所也。二者を兼ぬるを得べからずとせば、魚を舍てゝ熊掌を取る者なり。生も亦我が欲する所なり。義も亦我が欲する所なり。二者兼ぬるを得べからざれば、生を舍てゝ、義を取る者也。

▲萬物機より生でゝ、皆機に入る。

▲人禍あれば、心畏恐す。

人の行動は時として單純なるも、其動機は必ずしも單純なるに非ず。

（黑岩周六）

恐る可きは、波なく風無きと同時に、生命無きなり。（德富蘇峰）

十七　韓非子

權謀家（所謂權謀術數の士にして、其說險奇を極む。戰國に際して、一時重用されしも、遂に王の忌諱に觸れて、終りを全うせず。）

▲言を略して意を陳ぶれば、卽ち怯懦にして盡さずと言ひ、事を慮る事、廣肆（廣き事）なれば、則ち草野にして、倨傲なりと言はる。

▲隣國に聖人あるは、敵國の憂なり。

▲人主の患は、人を信ずるにあり。人を信ずれば則ち人に制せらる。人臣の君に於ける、骨肉の親あるに非るなり。

▲衆言を以て參驗せず、一人を用ひて、門戸となす者は亡ぶ。

▲智術の士は遠見にして明察なり。

▲主の利は豪傑を使ふにあり。臣の利は朋黨して利を用ゆるにあり。

▲小忠を思ふは、大忠の賊なり。小利を顧るは大利の殘なり。

▲夫れ事は密を以て成り、語は泄るゝを以て敗る。

▲その愛する所を論ずれば、則ち以て資を藉るとせられ、その憎む所を論ずれば、則ち以て試むとせらる。其說を省略すれば、不智なりと之を詘け、米鹽博辨（勝手向きの事まで仔細に論ずる）なれば、以て多しとし、文れりとなす。

▲主妾、等無ければ、必ず嫡子を危うす。兄弟服せざれば、社稷（家督）を危うす。

▲群臣の太だ富むは、君主の敗なり。

▲人臣は國に居るに私朝なく、軍に居るに、私交なし。其府庫

の私に貸すを得ざるは、是れ明君の其邪を禁ずる所以なり。

▲君はその欲する所以を現はす勿れ。君その欲する所を見はせば、臣將に彫琢せんとす。故に曰く、好みを去り、惡みを去れば臣卽ち素を露はす。賢を去り、知を去らば、臣自ら備ふ。

▲智あるを以て慮らずして、萬物をして、其處を知らしめ、行あるも、以て智とせずして、臣下の因る所を見、勇あるも以て怒らずして、群臣をして其武を盡さしむ。

▲公子（妾の子）既に衆くば、宗室憂吟せん。之を止むるの道は、

數ば木を披きて、枝をして茂からしむ。

▲凡そ人臣の道りて、姦を成す所の術あり。之を同牀と云ふ。何をか同牀といふ。曰く貴夫人、愛孺子（男色、寵幸者）の便僻、好色（美色）此れ人主の惑ふ所也。燕處の虞（退朝、燕居して娛む）に託し、醉飽の時に乘じて、其欲する所を求む。此れ必ず聽かるゝの術なり。人の臣たる者は、之に仕ふるに金玉を以てして、其主を惑はさしむ。此れを之れ同牀といふ。

愛の聲は百萬の援軍にまさる。

（ダンテ）

十八 孫子

兵法家（吳子と倶に東洋兵法家の泰斗にして、その言ふ所、往々人生の機微に觸る。春秋戰國の人。）

▲天下に常勝の道あり。常に勝たざるの道あり。常に勝つ道を柔といひ、常に勝たざるの道を强といふ。

▲日に千金を費し、而して後十萬の師擧る。

▲戰はずして人の兵を屈するは、善の善なるものなり。故に上兵は其謀を伐ち、其次は交を伐ち、其次は兵を伐ち、其次は城を攻む。

▲上下愁を同じうする者は勝つ。

▲慮を以て不慮を待つ者は勝つ。

▲彼を知り、而して己れを知らば、百戰して殆ふからず。彼を知らずして己れを知らば、一勝一負あり。彼を知らず、己れを知らずば、戰ふ毎に必ず敗る。

▲勝つ可からざるは守る也。勝つ可き者は攻るなり。

▲善く守る者は、九地の下に藏れ、善く攻むる者は、九天の上に動く。

▲古の所謂、善く戰ふ者は、勝ち易きに勝つなり。

▲良く戰ふ者の勝つや、知名無く勇功なし。

▲勝兵は先づ勝ちて、而して後に戰ひを求む。敗兵は先づ戰ふて、而して後に勝を求む。

▲兵は國の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからず。

▲曰く、主、孰れか道ある、將孰れか能ある、天時孰れか得た

る、法令孰れか行はる、兵衆孰れか强き、士卒孰れか熟練なる、賞罰孰れか明かなる。

▲能にして、之に不能を示し、用にして之に不用を示す。

▲近くして之に遠きを示し、遠くして之に近きを示す。

▲利して之を誘ひ、亂して之を取る。

▲實にして之に備へ、强にして之を避く。

▲怒つて之を撓め、卑ふして之を驕らしめ、佚して之を勞れしめ、親うして之を離れしむ。

▲兵は詭道なり。

十九　列子

處士

（諸子百家の一人にして、老莊哲學を祖述す。其人生觀は頗る皮肉を極め、行文險怪人の肺腑を貫く。）

▲精神は天の分、骨骸は地の分なり。

▲人はその嬰孤にある時は、氣專らに、志一なり。和の至りなり。和傷らず。德之より加はるなし。其少壯に至る時は、則ち血氣飄溢し、慾慮充起して、物に攻めらる。德衰ふ。其

老耄に至る時は、則ち慾慮柔かにして、體將に休せんとす。

▲子貢林類に曰ふ。先生は少くして、行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子無し、死期將に至らんとす、亦何の樂みあつて、穗を拾ふて、行く〳〵歌ふや。林類笑つて曰く、我が樂みとする處は、人皆是あり、而して反つて憂となす。少うして行を勤めず、時を競はず、故に能く壽き事此の如し。老いて妻子無し、死期將に至らんとす、故に樂む事、此の如し。

▲死と生とは、一度は往き、一度は反る。故に是に死する者、何ぞ彼に生きざるを知らん。

▲天の萬物を生ずる、唯人を貴しとなす。吾は人たるを得たり、之れ一つの樂なり。

▲泰山は好惡を立てず、故に能く其高さを成し、江海は涓滴を擇ばず、遂に能く其富をなす。

▲夫れ火の影は嚴なり、故に人灼かるゝこと鮮し。水の形は懦なり、故に人溺るゝ事多し。

▲權勢は、以て人に借すべからず、勢の重きは、人主の淵なり。臣は勢重の魚なり。魚を淵に失へば、亦得べからざるなり。人主其勢重を臣に失へば、復收むべからざるなり。

▲大名の下に虛士無し。

▲人主の道は、靜退を以て寶となす、自ら事を操らずして、拙と巧とを知り、自ら計らずして、禍と咎とを知る。

▲明君の賞を行ふや、曖乎として時雨の如し、百姓其澤に利す。其罰を行ふや、畏乎として雷霆の如し、神聖も解く能はざる

なり。

▲賞を偷めば、卽ち功臣其業を怠り、罰を赦せば、卽ち姦人其非を爲し易し。

▲上、長ずる所あれば、事卽ち方ならず、誇りて能を好めば、下に欺かる。

▲聖人の道は、智と巧を去る。

二十　韓退之

文豪

（漢代の七五駢麗の文を排して、古文を復活したる人。歐陽脩、柳宗元と共に文名嘖々たり。）

▲君臣は、道を同じうせず。下は名を以て禱む。君は其名を操り、臣は其形を效す。形名參同して、上下調和す。

▲言を聽くの道は溶として甚だ醉へるが如くす。

▲之を喜べば、事多く、之を惡めば、卽ち怨を生ず。

▲大臣の門は、唯人の多きを恐る。

▲彼れ求め、我れ與ふるは、讐人に斧を假すなり。

▲黨與の具はるは、臣の具なり。

▲一棲に兩雄あれば、其鬪ひや、嚶々たらん。

（孔明）

天の曆數は汝の躬にあり

二十一　荀子

異端論者（列子、楊子等と共に、東洋道德界の異端を以て目せらる。其說奇警にして人の意表に出づるものあり。）

▲伯樂其憎む所の者に、千里の馬を相するを敎へ、その愛する所の者に駑馬を相するを敎ゆ。千里の馬は時に一にして其利

緩く、駑馬は日に售られて、其利急なればなり。是れ周書に下言して上用するものなり。

▲巧詐は拙誠に如かず。

▲志の難きは、人に勝つに非ずして、自ら勝つにあり。故に曰く、自ら勝つを彊といふ。

▲遠水は、近火を救はず。

▲刻削の道、鼻は大なるに如くはなく、目は小なるに如くはなし。鼻の大なるは小にす可きも、小なるは大にすべからず。

目の小なるは、大にすべきも、大なるは小にす可からず。事を擧ぐるも亦然り。其復びす可き者をなせば、事敗るゝ寡し。

▲汝が生死を脱せんとして能はざる日、大凡二あり。定業の日と不定業の日と之れなり。前者に於ては、醫藥も汝を救ふ能はず、後者に於ては、天地も汝を殺す能はず。

▲世民の休息を得ざるは四事の爲なり。一は壽の爲にし、二は名の爲にし、三は位の爲にし、四は貨の爲にす。此の四者あるものは鬼を恐れ、威を恐れ、刑を懼る。之を遁人といふ。

活かす可く、殺す可く、命を制する外にあり。

▲命に逆らはずば、何ぞ壽を羨まん。貴に預らずば、何ぞ名を羨まん。勢を要せざれば、何ぞ位を羨まん。富を要せざれば、何ぞ貨を羨まん。之を順民といふ。

▲人は婚官せざれば、情慾半を失ふ。人は衣食せざれば、君臣の道息まん。

▲人は趨走以て利害を逃るゝに足らず。毛羽の以て、寒暑を禦ぐなし。必ず將に物によりて、以て性を養はんとす。

▲藥は毒を治めて功ある如く、世界も惡徒なくしては動く能はず。

▲今足るを知らざる者の憂は、終身解けず。

▲憂ふれば、則ち疾生ず、疾生じて智慧衰ふ。智慧衰ふれば、度量を失ふ。度量を失へば、則ち妄りに擧動す。妄りに擧動すれば、禍害至る。

生活とは勢力を探し求むるの術なり　（カント）

二十二　楊　子

異端哲學者（諸子百家の一人にして、孔孟の學說に反對し、堅白異同の辯を弄して、墨子荀子等と併稱せらる。俗に楊朱といふ。）

▲萬物の異にする所は生なり。同じき所は死なり。

▲身外無窮の事を思ふ勿れ。且つ眼前限りあるの盃を盡せ。

▲生くる時は相憐み、死は相捐つ。

▲人は天地の數を以て、五常の性を懷けり。有生の最も靈なるは人なり。

▲喜時の言は信を失ひ、怒時の言は多く體を失ふ。

▲快心の事は悔多し。

▲主は、狐より穽に陷らざる狡智を學び、獅子より豺狼を畏縮せしむる剛氣の用法を知るべし。

▲智を以て愚に說くは、必ず聽かれず。文王の紂に說きしは是なり。

▲奔車の下仲尼なく、覆舟の下伯夷なし。

▲小痛體にありて、長利身にあり。

▲天時に非ざれば、十堯と雖、一穗を生ずる事能はず。
（註、堯は堯舜の堯にして、堯十人の意味なり）

▲千釣も船を得れば、則ち浮び、錙珠も船を失へば、卽ち沈む。
千釣輕く、錙珠重きに非ざるなり。勢あると、勢なきとなり。

萬善は皆一愛に歸す

（バイロン）

二十三　墨子

道德論者

（異端哲學者の一人にして、兼愛の說を立て、支那倫理に一派を開きたるの人なり。）

▲君子終身の憂あり、一朝の患なし。

▲位卑くして、言高きは罪あり。

▲衆人の神を用ふるや噪し。噪しければ則ち費多し。

▲衆人は患にかゝり、禍に陷るも、猶未だ退く事を知らずして、道理に服從せず。聖人は未だ禍の形を見ずと雖、虛無にして道理に服從す。之を蚤服と稱す。故に曰く、唯客

なり、是を以て蚤服すと。

▲德積みて、後神靜かなり。神靜かにして後和多し。

▲士人屢々業を變ずれば、則ち其功を失ふ。

▲人は羽毛無し。衣ざれば則ち寒を冒すべからず。上天に屬せず、下地に着かず。腸胃を以て根本となし、食せざれば則ち生くる事能はず。是を以て、慾利の心を免れず。利を欲するの心免れざるは、其身の憂なり。故に聖人は、衣は以て寒を犯すに足り、食は以て虛を充すに足れば、則ち憂へず。

▲君子耕さずして食ふは何んぞや。

▲珠玉を寶とすれば、殃必ず其身に及ぶ。

▲極貧、極富は、共に養生に害あり。

▲大、小を攻め、强則ち弱を侮り、衆寡を賤しみ、詐、愚を欺き、貴は則ち賤に傲り、富は則ち貧に驕り、壯は則ち老を奪ふ。

▲利害と恩怨は、響應の如し。

▲勞して以て、貨財を營まず。

▲晏平仲、生を養ふ事を管夷吾に問ふ。之を恣にするのみ。

塞ぐなかれ。

▲剛ならんと欲する、必ず柔を以て、之を守る。强ならんと欲する、必ず弱を以て、之を保つ。

▲聖人は、童智を取りて、童狀を遺る。愚人は童狀を近づけて、童智を疎にす。

▲其動く事水の如く、其靜かなる事林の如し。

▲美厚常に厭足すべからず、聲色も常に翫聞すべからず。

▲名を成す者は、必ず廉なり。

感情は精神の溫素なり
一言以て終身行ふべきものは何ぞ、曰く、それ誠乎　（中井兆民）
（司馬光）

二十四　蘇秦

雄辯家（強秦を倒さんが爲に、六國を合同して之に當らんとしたる有名なる遊説家にして、世に連衡の張儀と並べて合從の蘇秦と云ふ。）

▲輿人、輿を示せば、則ち人の富貴ならん事を欲し、匠人、棺を成せば、則ち人の夭死せん事を欲す。輿人仁にして、匠人賤なるに非ざる也。

▲人主は以て、心を己が死を利とする者に加へざるべからず。
▲その憎む所に備ふるも、其禍は愛する所にあり。
▲家に常業あれば、飢ると雖、飢ゑず。　（易　經）

理を窮め性を盡し、以て合するに至る
成せばなる、なされば成らず、成る業を、
成らじとすつる人の敢果なさ　（本居宣長）

百事、決定と注意とに依りて成る　（二宮尊德）

二十五　豐臣秀吉

世界的大英雄

足利幕府の末期、戰國の時代に當り、尾張中村に生れ、織田信長に從ひ、撥亂反正の功を奏し、信長の亡ぶるや後を受けて天下を統一し、更に朝鮮を征し、更に支那を伐たんとし、中道にして歿す。古來ナポレオンと併稱さるゝ大英雄なり。

▲予が今日ある所以のもの、何の奇術もなし、唯今日の事を一心不亂に勤めたるのみ。明日は思はず、昨日を考へず、固より他事を思はず。

▲慾を離るべし。

▲女に心許すな。

▲人と物爭ひすな。

▲あさ寢するな。

▲何事も人並になれ。

▲一身の行末謹むべし。

▲何事もつく〴〵物思ひすな。

▲何事もさし出づるこそよかりけれ、戰の時も魁をして。

二十六　西郷南洲

志士、豪傑

維新三傑の隨一にして、明治元勳の首班を占む。明治十年、征韓の論合はず、薩南の地に叛し、戰ひ利あらず、遂に城山々中の露と消えしも其名は後世に嘖々たり。

▲道を行ふ者、素より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の立つとも、事の成否、身の死生抔少しも關係すな。命も要らず、名も要らず、官位も金も要らぬ人は始末に困るものなり。

▲道を行ふ者は、天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせざるは、自ら信ずる厚き故なり。

▲才に任せて爲す事は危くて見て居られぬものぞ、體ありてこそ用はあるなれ。

▲己れを愛するは、善からぬ事の第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むる事の出來ぬも、功に伐り、驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが故なり。

二十七　德川光圀

勤王家

德川幕府の末期に生れたる德川一門中、唯一の英才にして夙に勤王の志篤く、其著「大日本史」は山陽の「日本外史」と並んで、明治維新の基礎を成せり。晩年北條時頼の遺風を慕ふて、諸國を遍歷し、具さに民の疾苦を察せり。世に黄門といふは此公也。

▲苦は樂の種、樂は苦の種と知る可し。

▲掟におぢよ、火に恐ぢよ、分別無き者におぢよ。

▲朝寢す可からず、咄の長きすべからず。

▲小なる事を分別せよ。大なる事に駭くべからず。

▲慾と色と酒とは敵と知る可し。

▲九分は足らず、十分はこぼると知るべし。

▲分別は忍耐にありと知るべし。

▲仁過ぐれば弱くなる。義過ぐれば堅くなる。禮過ぐれば諂

となる。知過ぐれば嘘を吐く。信過ぐれば損をする。

二十八　澤庵禪師

禪僧（一休と併び稱せらるゝ知名の禪僧にして、言動の飄逸を以て聞ゆ。今日の澤庵漬は禪師が德川家光の爲に初めて造りしと傳ふ。）

▲苦もなく、樂も無きを上とす。

▲一切の事、中を以て樂とす。如何となれば寢る程樂な事なし。

▲あそこなる物取りて來よと云ふに、言ふ人の顏を見るは利根の者なり。言ふ人の顏を見ずしてあそこへ行けども終に

言ふ人のいふ所に行き向はず。鈍利かく違ふなり。

▲有慾にして施す事を知る者は義あり、功あり。人として犬馬の如く金銀を見る者は義なく、功なし。

▲道の至極は、皆静なり。

▲何事もおづるな〳〵。恐づれば仕損ふぞ。

▲溝をば、づんと飛べ。危しと思へば、はまるぞ。

▲君子は樂を求めず。

▲何事もせんと思ふ事を、ずんと思ひ切りてするは本心なり。

▲至人に奇跡なし。

▲異相なれば、其行ふ事も、必ず異なり。

▲人も容儀堅確なるは、秋の如くに冷たし。

▲明來れば暗滅し、語來れば默滅す。

▲人として、人の爲によかれと思ふこと誠に難いかな。凡そ生とし生ける者、爭はずといふ事なし。

二十九　二宮尊德

經世家

（勤儉力行を說き、終生公共事業に勵みたる人なり。今日行はるる報德教は此人を以て鼻祖となす。）

▲天地は別に業なし。萬物を生み出し、養ふを以て業とせり。

▲夫れ我が道の尊ぶ增殖の道は、直ちに天地を則として、云爲行動す可し。

▲至誠息むなし。

▲元日や、今年もあるぞ大晦日。

▲長閑さや、大磐石の人ごゝろ。

▲天地や無言の經を繰りかへす。

▲飯と汁、木綿着物ぞ身をたすく、其餘は吾を責むるのみ也。

▲福は勞にあり。

▲分度の法を守らしむべし。

▲天道善に福し、淫に禍す。

▲惻隱なきの心は人に非ず。羞恥なきの心は人に非ず。辭讓無きの心は人にあらず。是非無きの心は人にあらず。

▲經なるものは、常權なり。權なるものは、經に達するものな

り。

▲性は生の質、情は人の慾なり。

▲人の此世に處する、此世に補ひなくんば、卽ち蠢然たる天地間の一蠧のみ。

人間が物質に就いて爲し得る所は、之を適當に按排して、物自體の內部の力及び、他の天然物に存在する夫れ等の力を有效に働かしむるに止まる。

（ミル）

三十　貝原益軒

儒者、文章家

（儒教を俗解して、童幼婦女子に周知せしめたる篤學、能文の士にして「女大學」「養生訓」等其著頗る多し。）

▲女は容より心の勝れたるを善しとなせ。

▲他人は云ふに及ばず、夫婦兄弟にても、別を正しくすべし。

▲父母の命と媒酌とに依らざれば、交らずと小學にも見えたり。

▲婦人は別に主君なし。夫を主君と思ひ、敬ひ愼みて事ふ可し。

▲家內の交りは、一切人爲の虛を構へずして、天然の眞に從ふ可し。

三十一　中山みき子

宗教家（目下五百萬の信徒を有せる天理教の教祖にして、生涯篤行を以て有名なり。）

▲子が泣くと思ふ心はちがうでな、子が泣くでない、神のくどきや。

▲仕様と思ふてもならん、仕様まいと思ふても成つてくる理を聞き分け。

▲廣い心さへあれば、どんな道も附いてくる。

▲一つの理から出たものなら、一つの道の心になれば、何にも云ふ事はない。人々の心と云ふ理ありてはどうもならん。

▲兄弟勇む所あれば一つの理勇む、いづめば、一つの理いづむ。

▲屋敷より打ち出す言葉は、天の言葉である程に、理を恐れず、あんな事と思へばあんな事になる。

生命は短く、技藝は長く、機會は失ひ易く、經驗は確かならず。判斷は困難なり。

（ヒポクラテス）

三十二　著者の警句

▲誤解さるゝより、寧ろ解されざるを愈れりとなす。

▲借金には逃げて、貸金を追ふは人情なり。

▲理由なくして得るは、已に罪なり。

▲成功は悉く腦細胞より出づ。

▲事物を知らんとせば、必ず其歴史を知れ。

▲他に求むる前、先づ我に求めよ。

▲言葉を恐れよ。

▲人をして愉快を感ぜしむる才幹は處世上の一要素なり。

▲成功の秘訣は數理を究むるにあり。

▲氣の知れぬ人は、信用されず。

▲吾人は習慣の軌道を歩む。

近代人の警句（附録）

1 大隈重信

偉人

（本邦第一流の政治家にして、其名聲は遠く國境を超ゆ。政界失脚後早稻田に學園を拓き青年を薫陶し今や門下の全國に瀰漫せるあり、其廣長舌と鐵志とは現代の珍とするに足る。彼の百二十五歳の説の如き蓋しこの鐵志より生れたるもののみ。）

▲事に當つて腹にて考へよ、腹に力を入れ、腹に注意を怠らぬやうになせ。是れ事に成功する第一の道なり。

▲吾人は習慣を資本とし、其利子によりて生活せよ。

▲服裝坐作進退の端正を計れ、自己を省み、先方の人格を尊重せよ。愛嬌あれ、圭角なからしめよ、誠實なれ、時間を尊重せよ。

▲金錢を贏けんとするものあり。積んで散ずるにあらず、集めて用ゆるに非ず、是等畢竟一種の道樂と云ふの外なし。

▲人はパンのみにて生活し得るものなり。然れども人は靈の糧を要する者なり。吾人はパンを得ると共に、心の富を蓄積せざるべからず。

2 尾崎行雄

政治家

（日本にて名士なる名號の最もよく適せるはこの人也。犬養毅と共に憲政の神と云はれ、青年崇拜の標的なる言論、文章に長じ、婦人を敬し、青年を愛し、其風格襟度洒然として歐米貴公子の風あり、議會開設以來の代議士にして、文部大臣、東京市長を經て、司法大臣に至れり。）

▲不健全なる氣分を一洗せんとせば、宜しく讀書と訪問に努むべし。

▲過去は歸らず、未來は賴む可からず、今日只一日を賴む可し。

▲内に蠻氣を藏し、外ハイカラたる可し。鐵拳を綿に包むは現

代處世術の上乘たり。

▲全力を盡して自我を發揮す可し。斯くて無くてならぬ人となれ。强持てに非ず、憎まれ子世に憚らるゝに非ず、自我發揮なり、自己完成なり。斯くして人生始めて意義あり。

▲吾人は出來得る限り、自己の權利と義務のために辯ぜざる可からず。沈默は必ずしも常に黃金には非ざるなり。

3 安田善次郎

實業家（安田家總理として五千萬圓の巨富を擁するは人の知る所、銀行家として堅實無比の品性と險悚至極の手腕とは兩々相俟つて、我金融界の一大權威たり。）

▲他力を賴むな、自立の商業を以て渡世せよ、勤儉を旨として、身分不相應の生活をすな。

▲決斷は速かなれ。

▲不運の人と事を共にすな。

▲商才あり、健康にして、節儉ならば、富まざらんとするも得可からず。

▲一錢を貯ふれば、一錢を得たるなり。

▲分勞は熟練の上に大利あり。

4 三宅雪嶺

哲人、評論家（「日本及日本人」主筆、文學博士、學問深博にして、見識、群を拔く、日本論壇の重鎭たり。其人格も亦高潔にして、一代の師表とす可し。）

▲青年は宜しく生活難と苦鬪す可し。斯くして初めて處世上十分の力量を有するに至らん。

▲腹八合主義は、人生の妙諦なり。二合の空所ありてこそ活動

の餘裕もあるなれ。

▲諺にも、大魚は淀みに生長すと云ふ。古來大人物の都會より生ぜずして、田舍より出づるは、畢竟この理に依る。

▲東京を去る一尺ならば、一尺なるだけ、豪健なる思想を養ふを得可し。

▲感情を以て事物を解釋する勿れ。感情の解釋は多く婦女子の愚痴に終れば也。

▲予は何人に向つても不平家たれと慫慂す。何となれば不平を

懷く者は遂に成功を得べければなり。

5 黑岩周六

哲學者、評論家

（萬朝社長、深刻なる思想と精透なる文章を以て、評論界の一權威たり。壯時飜譯小說にて呻らせたる涙香小史は今や社會運動の急鋒となる。蝮の周六は今や一個堂々たる紳士となれり。其著「天人論」最も顯る。）

▲無益なる事を爲す勿れ。爲す可き事を捨ておく勿れ。

▲爲すには全力を以てなせ。爲すとは最上を爲すなり。

▲我を他人と思へ。

▲何時にても用意あれ。

▲美人の鼻上、三分の肉を削れ、是れ汝の煩惱を去る唯一の良法なり。

▲予は客を愛す。長居せざるの客を大に愛す。來らざるの客を最も愛す。

6 茅原華山

文明批評家、新聞記者（萬朝報編輯員、徹底せる社會觀と犀利なる論鋒を以て、大正論壇に雄視す。其主宰せる『第三帝國』は今や全國の青年を熱狂せしめつつあり。）

▲苟くも我にこれを捉ふるの用意あらば、神機は開花と啼鳥と到る所にあり。

▲事の成敗を事後に曉るは、要するに凡物の事のみ。英雄は事前に於て成敗の直感を得るなり。

▲處世の妙は實力にあり、蓄積にあり科學にあり。而して是等を一貫する眞摯にして熱心なる努力にあるのみ。

▲人は笑ふ事を欲する如く亦泣く事を欲す。

▲自個卽ち自個に服從す。是れ獨立の眞義なり。

7 安部磯雄

社會學者（幸德一派の急進的社會主義に對し、日本に於ける漸進的社會主義の泰斗にして、常識に富み其意見は常に公平なり。早大教授。）

▲人間が困窮に陥る原因は、怠惰に依る事の多きは勿論なれど、又境遇、天分の他に劣りしに依る事も、決して稀ならず。

▲世の中には、よく之から彼れへと移動して止まない人があるが。こんな人は成功した例がない。

▲求めて艱難をする必要はないが、何等の艱難に遭はず、ヌット育つた人等のする事は、如何にも張合がない。

▲現代に生の壓迫あるは事實なり。されど其半面に生の便福ある事を忘るべからず。

▲今は人が無駄な言葉を使はぬ。簡單明瞭を尙ぶからである。昔は言葉が羽叩きしたが、今は飛行機の如く、一直線に飛んで行くのだ。

8 加藤咄堂

修養論者、雄辯家

（大内青巒居士の門下にして、夙に新佛教を稱へ、高島米峯等と共に佛教界の革新を計る。演壇の雄にして、兼ねて修養訓の泰斗たるは人の知る所也）

▲内を立つるは本、外に求むるは末なり。外に求めて其本を培ひ、内に省みて其末を茂らしむ。

▲我が心解き難し、何ぞ他の心を解かん。解き難き心と心との結ばれて組みなされたる世の中の人の心ほど解き難きはなし。

▲得意の境には、縁を尋ねて千里も我に親しみ、失意の境には、近親も路傍の人の如し。

▲得る所は一、投げて與ふれば怫然として色を作し、禮を厚うして授くれば喜んで之を受く。

▲人は唯實用のみに動くにあらず、趣味も亦人生を支配する一半の勢力なり。

▲理は萬人に通ずるも、情は個々其快、不快を異にす。情の測り難きは、理の推し難きの比に非ず。

▲世事葛藤、詮じ來れば色と慾のみ、一切罪惡之に萠し、一切の紛擾之より生ず。

9 浮田和民

政治學者（早大教授、太陽主筆、曲學阿世の學者のみ跋扈する今日骨硬氏の如きは希れなり。其眞摯なる態度はクリスチヤンたるに背かず。）

▲健康を保つには道德の必要あり。

▲事物はそれ自ら目的たるの價値なし。

▲人格は國家、社會のために犧牲にすべからず。

▲人間は萬物の目的なり。

▲千秋萬歲月は照り、星は輝かんも、人間の目を離れて、果し

て何の尊貴ありや。

▲人慾は無限なれど人壽には限りあり。若し過程の短縮に向つて努力せざりせば、馬鈴薯を養る間に人壽は盡く可し。

10 内ケ崎作三郎

牧師（早稻田大學教授にして兼ねてユニテリアン教會の牧師たり。宗教哲學の素養深く、英語に熟達す。健辯にして且つ能文、風貌又堂々として一個の好紳士たり。文博の候補者。）

▲人生の危機は二十歲より二十五歲までなり。人若し怠惰にして此歲月を浪費すれば、殆ど彼は人生の潮流に投ずる機會を

失ふものなり。

▲家庭生活を營み、尙其上餘裕あらば、宜しく社會の公事に盡す可きなり。

▲人生に於て、最も大切なるは、成功とか失敗とか云ふものに非ずして、人生の終りに於て、其人の有する人格そのものなり。

▲人は世間の毀譽褒貶より超越する所の高尙なる動機を其心中に有せざる可からず。

▲青年にして何等の助力なく、指導なく、刺擊なく、又目的なき時は、彼等は恰も沙漠の中に消滅し、或は全く蒸發する川の如く、自己の存在を失ふものなり。

○

○一人の成功者を出す裏面には、幾百幾千の失敗者が潛んで居る。

○外圍の事物に動かされずして、自己を磨け。

○生活に價値あると然らざるとは、周圍の事物によりて決するに非ずして、一に其人の精神作用にあり。

○山間生活は雌伏時代として、大に善用す可し。

○人生の禍福は、天に在るに非ずして、寧ろ自己の胸中に備はる。

（增田義一）

大正三年十一月十五日印刷
大正三年十一月二十日發行

定價金拾五錢

著者　宮地猛男
東京市神田區駿河臺西紅梅町六番地

發行者　今井助松
東京市京橋區北紺屋町四番地

印刷者　山田實

發兌元　應來社書房
東京市神田區駿河臺西紅梅町六番地

大賣捌　登美屋書店
大阪市東區淡路町四丁目

不許複製

應來社發行書籍目錄

今井雷堂著
座右叢書第四編 **世渡り訓話** (四版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■世渡りの方法を說いて詳密蓋し類書中の白眉なり

今井雷堂著
座右叢書第五編 **吾人の經典** (三版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■死生の解決をなして安心立命の道を敎ゆ一讀萬金

今井雷堂著
座右叢書第六編 **天命と人の運** (近刊) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■天命と人爲の運とを明かにし逆運一轉の道を說く

應來社發行書籍目錄

今井雷堂著
座右叢書第壹編 **修養その日々** (十七版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■一種異れる悟道の妙を以て處世成功の要訣を說く

今井雷堂著
座右叢書第貳編 **活ける格言** (八版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■一言一句日常の爲になることを說く他に比類無し

今井雷堂著
座右叢書第參編 **禪の要領** (五版) 定價金貳拾錢 郵稅四錢

■禪學の書は山程あるが要領を得る書は此外に無し

278
49

應來社發行書籍目錄

藤岡了空師著

修養漫畫 **氣隨氣まゝ**（再版）定價金五拾錢 郵稅六錢

■一畫一文皆脫俗す處世修養また養病の參考書なり

宮地猛男著

要領文庫第壹編 **哲學とは何んぞや**（三版）定價金拾五錢 郵稅貳錢

■哲學を平易に解說して遺憾なし眞に學界の珍書也

宮地猛男著

要領文庫第貳編 **偉人警句集**（新刊）定價金拾五錢 郵稅貳錢

■古今東西四拾偉人の警句を網羅す處世上の良師友

終